

バーヴィヴェーカの円成実性批判 —MHK V 87の解釈—

田村 昌己

0 中観派の学匠バーヴィヴェーカ(Bhāviveka, ca. 490–570)は、主著『中観心論』(*Madhyamakāhṛdayakārikā*, MHK)第5章第85偈から第112偈にかけて、瑜伽行派が主張する〈完成された自性〉(pariṇiṣpannasvabhāva, 円成実性)¹を批判する。本稿はそのうちのMHK V 87におけるバーヴィヴェーカの批判点を考察するものである。

MHK V 87は次のような偈頌である。

tatrānyatattvāsadbhāvād² yađiṣṭam tattvadarśanam /
ghaṭe 'py anyaghaṭābhāvāt³ kiṃ neṣṭam tattvadarśanam //

山口[1941: 552]が指摘するように、この偈頌と同内容の批判はバーヴィヴェーカの別著作

¹三自性における svabhāva に関して、ステイラマティは次のような語義解釈をしている。TrBh 128.6: svena svena lakṣaṇena vidyamānavad bhavati svabhāvaḥ / (「自性」(‘svabhāva’)という語は、それぞれ自身の特相をもって存在するかのように存在するもの(svena svena lakṣaṇena vidyamānavad bhavati)を指示する)ステイラマティに従えば、三自性における svabhāva は「固有の本質」等を意味しない。本稿では便宜上三自性における svabhāva に対して「自性」という訳語を与えるが、「固有の本質」等を意味するものではなく、「存在するもの」(それぞれ自身の特相を持って存在するかのように存在するもの)を意味するものとして理解されるべきであることをあらかじめ断っておく。

²tatrānyatattvāsadbhāvād] Ej; tattve 'nyatattvāsadbhāvād SG, H, S, Ec; tattve 'nyatattvasadbhāvād L₁, L₂; tatve nyatatvasadbhāvād Ms; de la de nyid gzhan med phyir (*tatrānyatattvāsadbhāvād) Tib.

³ghaṭe 'py anyaghaṭābhāvāt] Ej, S; ghaṭe 'pi dvighaṭābhāvāt L₁, L₂, H, Ec; ghaṭe py hi ghaṭābhāvāt Ms, SG; bum la'ang bum pa gzhan med pas (*ghaṭe 'py anyaghaṭābhāvāt) Tib.

『大乘掌珍論』にも見出される。この偈頌を理解する鍵は、a句の「それ(真実[tattva])にそれ以外の真実(anyatattva)が存在しないこと」(tatrānyatattvāsadbhāvaḥ)をどのように解釈するかにある。しかしながら、先行研究の解釈には混乱が見られ、統一的な解釈はなされていない。当該偈頌の解釈のためには、瑜伽行派の主張する〈完成された自性〉の定義と根本真実(mūlatattva)を押さえなければならない。

1 考察に先立って、MHK V 87の議論がいかなる文脈でなされているのかを押さえておこう。MHK V 85–112における〈完成された自性〉批判の構成は以下の通りである。

- kk. 85–98: 〈完成された自性〉は真実ではない
 - kk. 85–91ab: 〈完成された自性〉は真実としての特徴を持ち得ない
 - kk. 91cd–98: 〈完成された自性〉を所縁とする知は真実知として妥当しない
- kk. 99–103: 中観派にとっての真実
- kk. 104–110: 推理に依拠して真実の証得がある
- kk. 111–112: まとめ: 瑜伽行派にとっての〈完成された自性〉という真実は論理及びアーガマと矛盾する

瑜伽行派にとって、〈完成された自性〉は真実(tattva)・空性(sūnyatā)・勝義(paramārtha)・真如(tathatā)に他ならない⁴。バーヴィヴェー

⁴ヴァスバンドウ及びステイラマティによれば、〈完成された自性〉は「勝義」(paramārtha)や「真如」(tathatā)

カは、MHK V 85-98において、〈完成された自性〉は真実ではありえないことを論じる。まず MHK V 85-91abにおいて、瑜伽行派が真実としての〈完成された自性〉の特徴として認める以下の諸点は妥当し得ないことが指摘される。

- k. 85: 分別され得ないこと (nirvikalpatva)
- k. 86: 言語表現されえないこと (nirabhi-lāpyatva)
- k. 87: 真実の直観が起こること
- kk. 88-90: 虚空のように本来的に清浄であること
- k. 91ab: 実有 (dravyasat) であること

次に MHK V 91cd-98において、〈完成された自性〉を所縁とする知は真実知として妥当しないことが述べられる。すなわち、〈完成された自性〉を所縁とする知が一切智であること、無所縁であること、所知と知の平等性を覚知するものであることが否定される。また、瑜伽行派の主張するアーヤ識論においては真実知の生起が妥当しないことも指摘される。

続く MHK V 99-103では、中観派が解釈するところの一切法無自性という真実について論じられる。バーヴィヴェーカによれば、中観派にとっての一切法無自性という真実こそが分別され得ないものや言語表現され得ないものとして妥当する。さらに、その真実を覚る智こそが一切智であり無所縁であり平等性を覚知する。

さらに MHK V 104-110では、推理と真実の証得の関係が論じられる。真実は推理の対象ではない。しかし、推理によって真実知の対治である分別知が取り除かれる。そのことによって、無分別知が生じ真実が証得される。

最後に MHK V 111-112において、瑜伽行派の主張する〈完成された自性〉という真実は論

と表現される。また「法界」(dharmadhātu) やそれと同義の「真実」(tattva) や「空性」(sūnyatā) とも表現される。TrBh 130.11-15: kiṃ punaḥ paramārthābhīdhanenaiva pariniṣpanno 'bhīdhatavyaḥ / nety āha / kiṃ tarhi tathatāpi saḥ / apīśabdhan na kevalaṃ tathatāśabdenaivābhīdhatavyaḥ / kiṃ tarhi yāvanto dharmadhātuparyāyāḥ sarvais tair apy abhīdhatavya iti // (「問」それでは、〈完成された〔自性〕〉はただ「勝義」(paramārtha) という語によってのみ表現されるべきなのか。【答】「否」と答える。そうではなくて、それ(〈完成された自性〉)は真如(tathatā)でもある。「も」(api) という語に基づいて、〔〈完成された自性〉は〕ただ「真如」という語によってのみ表現されるべきではなく、そうではなくて、法界の同義語である限りのそれら全て〔の語〕によっても表現されるべきである」)

理及びアーガマと矛盾することが指摘され、一連の批判が締めくくられる。

このようにバーヴィヴェーカは、MHK V 85-112において、瑜伽行派の主張する〈完成された自性〉が真実ではないことを明らかにし、何が真実として認められ、そして、どのようにしてそれが証得されるのかを論じている。本稿が取り上げる MHK V 87 は、〈完成された自性〉が真実である場合に導かれる不合理な帰結を真実の直観との関連から指摘するものである。

2 それでは、当該の MHK V 87 のサンスクリット原文とチベット語訳、試訳、先行訳を提示しよう。

【サンスクリット原文】

tatrānyatattvāsadbhāvād⁵ yadiṣṭaṃ tattvadarśanam /
ghaṭe 'py anyaghaṭābhāvāt⁶ kiṃ neṣṭaṃ tattvadarśanam //

【チベット語訳】

de la de nyid gzhan med phyir //
gal te de nyid mthong 'dod na //
bum la'ang bum pa gzhan med pas //
ci phyir de nyid mthong mi 'dod //

【試訳】

もし、それ(真実)にその真実は存在しないということに基づいて真実の直観(tattvadarśana)があるということが認められるならば、壺にそれ以外の壺は存在しないということに基づいても真実の直観があるということがどうして認められないことがある。

【先行訳】

山口 [1941]: 「〔眞性勝義を見ると言ふと雖も、〕彼〔無分別・勝義〕の上に彼同じきもの更に別には無きが故に、彼〔勝義〕は見らるゝものなり」と若し許さば、瓶〔を見ることに〕於ても更に餘の瓶はなきが故に、何故にそこに彼〔眞性〕が見られたりと許さざる。〔筆者注記：チベット語訳からの翻訳〕

Hoornaert [2003]: If you argue that [to see the perfectly established nature] is to see the true nature of things because there exists no other true nature in that [true nature], why not say that [to see a pot]

⁵tatrānyatattvāsadbhāvād] Ej; tattve 'nyatattvāsadbhāvād SG, H, S, Ec; tattve 'nyatattvasadbhāvād L₁, L₂; tatte nyatattvasadbhāvād Ms; de la de nyid gzhan med phyir (*tatrānyatattvāsadbhāvād) Tib.

⁶ghaṭe 'py anyaghaṭābhāvāt] Ej, S; ghaṭe 'pi dvighaṭābhāvāt L₁, L₂, H, Ec; ghaṭe py hi ghaṭābhāvāt Ms, SG; bum la'ang bum pa gzhan med pas (*ghaṭe 'py anyaghaṭābhāvāt) Tib.

is to see the nature of things because in a pot also there exists no second pot?

斎藤 [2007]: 真実のなかに他の真実は実在しないのであるから、もしも〔それにも関わらず〕真実の知見が認められるのなら、瓶のなかにも他の瓶は存在しないのであるから、どうして〔それにも関わらず〕真実の知見が認められないであろうか。

Eckel [2008]: If [you] think that the vision of reality is [vision] of this [absolute identity], because there is no other reality, why not think that the vision of reality is [vision] of a pot, because there is not a second pot?

3 先行研究の解釈を、「真実の直観」をどのように理解しているのか、そして、「真実にそれ以外の真実が存在しないこと」をどのように理解しているのか、という二点に絞って見てみよう。

3.1 「真実の直観」に関して注目されるのは、Hoornaert 及び Eckel の解釈である。彼らはここで言う「真実の直観」は〈完成された自性〉の直観であると理解している。このように解釈する根拠として、Eckel [2008: 284, fn. 109] は MHK V 5 において示される「真実を直観する者たちは〈完成された自性〉を観る」という瑜伽行派の主張を提示する。この Hoornaert 及び Eckel の解釈は妥当である。なぜなら、このように解釈してこそ瑜伽行派の〈完成された自性〉の批判となりうるからである。

3.2 「真実にそれ以外の真実が存在しないこと」に関しては、先行研究間で解釈が異なっている。

3.2.1 まず、山口は「真実に対して、それを概念的に捉える知が起らないこと」と理解している⁷。山口は MHK V 87 を MHK V 14 と同内容の議論であると理解している⁸。MHK V 14 は「〈二者の非存在〉を所縁とする智は無分別であるが故に仏陀の智（如実智）である」とい

⁷山口は MHK V 87ab の内容を次のようにまとめている。山口 [1941: 553]: 無之有に於て勝義を見る智と云ふことが謂はれても、勝義に對して、第二の「見る智」と云ふやうな勝義を別に立てると云ふ意味ではないのであるから、勝義を見ると云ふことに由つて、かの勝義は正に見られてあるのである。

⁸山口 [1941: 554]。

う瑜伽行派の主張を否定するものである⁹。山口は、当該の「真実の直観」に関してもその無分別性が強調されていると理解して、上述のような解釈をしている。

3.2.2 Hoornaert [2003: 156, fn.4] 及び Eckel [2008: 204, fn. 109] は、「真実にそれ以外の真実は存在しないこと」に関して瑜伽行派文献に見られる関連する議論として『解深密経』の以下の記述を指摘する。

SNS 51.28–52.17: rab 'byor gzhan yang ji ltar phun po dang / skye mched dang / rten cing 'brel par 'byung ba dang / zas dang bden pa dang khams dang / dran pa nye bar bzhag pa dang / yang dag par spong ba dang / rdzu 'phrul gyi rkang ba dang / dbang po dang / stobs dang / byang chub kyi yan lag 'di dag phan tshun mtshan nyid tha dad pa dang / ji ltar 'phags pa'i lam yan lag brgyad pa phan tshun mtshan nyid tha dad pa yin pa de bzhin du gal te / chos de dag gi de bzhin nyid don dam pa chos bdag med pa 'ang mtshan nyid tha dad pa yin par gyur na ni / des na de bzhin nyid don dam pa chos bdag med pa 'ang rgyu dang bcas pa yin zhing rgyu las byung ba yin par 'gyur ro // rgyu las byung ba nyid yin na ni 'dus byas yin par 'gyur ro // don dam pa ma yin na ni don dam pa gzhan zhi gyongs su btsal dgos par 'gyur ro // rab 'byor gang gi phyir de bzhin nyid don dam pa chos bdag med pa [rgyu dang bcas pa ma yin pa dang] rgyu las byung ba ma yin pa dang / 'dus byas ma yin pa dang / don dam pa ma yin pa ma yin pa dang / don dam pa de'i don dam pa gzhan yongs su btsal bar bya mi dgos kyi de bzhin gshegs pa mams byung yang rung ma byung yang rung ste / rtag pa rtag pa'i dus dang ther zug ther zug dus su chos gnas par bya ba'i phyir chos mams kyi chos nyid dbyings de ni mam par gnas pa kho na yin pa de'i phyir / rab 'byor mam grangs des kynag khyod kyis 'di ltar thams cad du ro gcig pa'i mtshan nyid gang yin pa ni don dam pa yin par rig par bya'o // さらにまた、スプーティ (rab 'byor, *subhūti) よ、例えば、蘊 (phun po, *skandha)・処 (skye mched, *āyatana)・縁起 (rten cing 'brel par 'byung ba, *pratīyasamutpāda)・食物 (zas, *anna/bhojana)・諦 (bden pa, *satya)・界 (khams, *dhātu)・念住 (dran pa nye bar bzhag pa, *smṛtyupasthāna)・正断 (yang dag par spon ba, *samyakprahāna)・神足 (rdzu 'phrul gyi rkang ba, *ṛddhipāda)・根 (dbang po, *indriya)・力 (stobs, *bala)・覺支 (byang chub kyi yan lag, *bodhyaṅga) というこれらは相互に

⁹MHK V 14 の議論の詳細については田村 [2011] を参照。

(phan tshun, *anyonyam) 特徴を異にし (mtshan nyid tha dad pa, *bhinnalakṣaṇa)、そして、例えば、八支聖道 (*phags pa'i lam yan lag brgyad pa, *āryāṣṭāṅgamārga) は相互に (phan tshun, *anyonyam) 特徴を異にする (mtshan nyid tha dad pa, *bhinnalakṣaṇa)。

それと同様に、もし、それらの法の真如 (de bzhin nyid, *tathatā) あるいは勝義 (don dam pa, *paramārtha) あるいは法無我 (chos bdag med pa, *dharmanairātmya) が〔相互に〕特徴を異にする (mtshan nyid tha dad pa, *bhinnalakṣaṇa) ならば、その場合 (des na, *tatas)、真如 (de bzhin nyid, *tathatā) あるいは勝義 (don dam pa, *paramārtha) あるいは法無我 (chos bdag med pa, *dharmanairātmya) は原因を有するもの (rgyu dang bcas pa) であり原因から生じたもの (rgyu las byung ba) であることになろう。〔真如・勝義・法無我が〕まさに原因から生じたもの (rgyu las byung ba) であるならば、〔それらは〕有為 (*dus byas, *saṃskṛta) であることになろう。〔真如・勝義・法無我が有為であるならばそれらは勝義ではない。真如・勝義・法無我が〕勝義でない (don dam pa ma yin) ならば、別の勝義 (don dam pa gzhan zhig, *anya-paramārtha) が探求されなければならない (yongs su btsal dgos pa, *paryeṣṭavya) だろう。スプーティよ、真如 (de bzhin nyid, *tathatā)、勝義 (don dam pa, *paramārtha)、法無我 (chos bdag med pa, *dharmanairātmya) は、原因を有するもの (rgyu dang bcas pa) ではなく、原因から生じたもの (rgyu las byung ba) ではなく、有為 (*dus byas, *saṃskṛta) ではなく、勝義でないもの (don dam pa ma yin pa) ではなく、その別の勝義である勝義が探求されるべきではない。そうではなくて、〔真如・勝義・法無我は〕如来が出現するときも妥当し、出現しないときも妥当する。常に永遠に法は住するであろうから、諸法の法性〔・法〕界、それはまさに確立している。それ故に、スプーティよ、この方法 (rnam grangs, *paryāya) によっても、あなたは、このように全面的に単一の特徴を持つものが勝義であると理解すべきである。

ここで議論の前提となっているのは勝義は諸法の法性であり、それは無為であるということである。諸法は相互に特徴を異にするものである。諸法と法性が存在論的に区分され得ないという前提に立てば、勝義も相互に特徴を異にするものである。その場合、その勝義は有為であり、勝義ではないことになってしまうから、それ以外の別の勝義を探求する必要性が生じてしまう。しかしながら、勝義は相互に特徴を異にするものではなく、単一な特徴を持つものである。

『解深密経』がここで強調しているのは、勝義は絶対的に単一であるということである。こ

のことを踏まえれば、Hoornaert 及び Eckel は目下の「真実にそれ以外の真実は存在しないこと」を真実の単一性を示すものとして解釈していることになる。真実は多様に区分されるものではなく、それ故に、それ以外の第二の真実は存在し得ない。Hoornaert 及び Eckel は「真実にそれ以外の真実は存在しないこと」は「〈完成された自性〉の直観は真実の直観である」こと理由であると理解している。しかし、真実の単一性を示す「真実にそれ以外の真実は存在しないこと」がどうしてその理由となりうるのか極めて不明瞭である。

3.2.3 一方斎藤については、「真実にそれ以外の真実が存在しないこと」についてどのような解釈をしているのかをその翻訳から理解することは困難である。

4 以上、先行研究の問題点を確認した。では、MHK V 87 はどのように解釈されるべきなのか。まずは注釈書『思釈炎』(Tarkajvālā, TJ) の説明を見てみよう。

MHK V 87 [D222a6-7; P247b6-8]: gal te don dam pa de la don dam pa'i de nyid gnyis pa gzhan med pa'i phyir gal te don dam pa stong pa nyid des de nyid mthong bar 'dod na de lta na bum pa la'ang bum pa gnyis pa gzhan med pas de mthong bas kyang ci'i phyir don dam pa'i de nyid mthong bar brtag par mi 'dod¹⁰

もし、それ即ち勝義 (don dam pa, *paramārtha) に別の即ち第二の (gnyis pa, *dviṭīya) 勝義という真実が存在しないということに基づいて、その勝義である空性 (don dam pa stong pa nyid, *paramārthasūnyatā) によって真実の直観が起こるということが認められるならば、その場合、壺に別の即ち第二の壺が存在しないということに基づいても、そのことを直観しさえすれば勝義という真実の直観が起こると構想されることがどうして認められないことがあろう。

TJ の記述で注目されるのは「勝義である空性」(don dam pa stong pa nyid, *paramārthasūnyatā) である。ここでは「真実 (勝義) にそれ以外の真実 (勝義) が存在しないこと」が「勝義である空性」であると述べられている。TJ の言う「勝義である空性」は、所謂三無自性における「勝義である無自性」(paramārthaniḥsvabhāvatā)

¹⁰ 'dod / D; 'dod de P

と同義であると考えらるべきである。「勝義である無自性」(勝義無自性)は、〈完成された自性〉に関して説かれる無自性のことであり、それは出世間智の対象(勝義)としての〈完成された自性〉そのものを指している。そして、「真実にそれ以外の真実が存在しないこと」とは「〈他に依拠する自性〉に〈構想された自性〉が存在しないこと」を意味する。

5 真実の直観に関して、瑜伽行派の主張が提示される MHK V 5 を見ておきたい。

MHK V 5:
kalpitānupalabdhi¹¹ ca paratantrasya cāgraha¹²/
svabhāvaṃ pariniṣpannam iṣṅante tattvadarśinah//
〈構想された〔自性〕〉(kalpita[-svabhāva])は認識されず(anupalabdhi)、〈他に依拠する〔自性〕〉(paratantra[-svabhāva])は把握されない(agraha)。真実を直観する者たちは〈完成された自性〉(pariniṣpanna-svabhāva)を観る。

ここでバーヴィヴェーカは、瑜伽行派にとって真実を直観するということが〈完成された自性〉を直観することに他ならないことを述べている。事実、瑜伽行派の文献において〈完成された自性〉は無分別出世間智によって直観されるべきものであるとされている¹³。このことを踏まえれば、Hoornaert や Eckel が解釈するように、MHK V 87における真実の直観は〈完成された自性〉の直観であると言えよう。

6 次に、〈完成された自性〉について検討したい。

6.1 まずは〈完成された自性〉がどのように定義されるのかについて、ヴァスバンドゥ著『唯識三十頌』の記述を見てみよう。

TrK 21cd:
niṣpannas tasya pūrveṇa sadā rahitatā tu yā //

一方、〈完成された〔自性〕〉(niṣpanna)は、それ(〈他に依拠する自性〉)が先のもの(〈構想された自性〉)を常に欠くことである。

¹¹ kalpitānupalabdhi] H, S, SG, Ms; kalpitānupalabdhes L₁, L₂. Ec.

¹² cāgrah] H, S, SG, Ms; cāgrahāt L₁, L₂, Ec

¹³ TrBh 126.11: nirvikalpalokottarajñānadṛṣṭye pariniṣpanne svabhāve ... /

ステイラマティはこの偈頌を次のように説明している。

TrBh 124.8–12: avikārapariniṣpattiyā sa pariniṣpannaḥ / tasyeti paratantrasya pūrveneti parikalpitena / tasmin vikalpe grāhyagrāhakabhāvaḥ parikalpitaḥ / tathā hi tasmin vikalpe grāhyagrāhakatvam avidyamānam eva parikalpyata iti parikalpitam ucyate / tena grāhyagrāhakeṇa paratantrasya sadā sarvakālam atyantarahitatā yā sa pariniṣpannasvabhāvaḥ //

それ(自性)は、変化しないものとして完成されているから(avikārapariniṣpattiyā)、完成されたもの(pariniṣpanna)と呼ばれる。「それが」(tasya)とは〈他に依拠する〔自性〕〉が(paratantrasya)ということである。「先のを」(pūrveṇa)とは〈構想された〔自性〕〉を(parikalpitena)ということである。その分別における所取能取関係(grāhyagrāhakabhāva)は構想されたもの(parikalpita)である。すなわち、その分別において所取能取性(grāhyagrāhakatva)はまさに存在しないにもかかわらず構想されるから、「構想されたもの」(parikalpita)と言われる。〈他に依拠する〔自性〕〉がその所取と能取を常に(sadā)即ちあらゆる時に(sarvakālam)絶対的に欠くこと(atyantarahitatā)、それが〈完成された自性〉(pariniṣpannasvabhāva)である。

ステイラマティによれば、三自性における「自性」(‘svabhāva’)という語はそれぞれ自身の特相をもって存在するかのように存在するもの(svena svena lakṣaṇena vidyamānavad bhavati)を指示する¹⁴。その存在するものとは識である。自性即ち存在するものである識は、変化しないものとして完成されているが故に、「完成されたもの」(pariniṣpanna)と呼ばれる。つまり〈完成された自性〉は変化しないその真のあり方をした識である。ここではその識の真のあり方が、「〈他に依拠する自性〉が〈構想された自性〉を常に欠くこと」と述べられている。ステイラマティによれば、それは分別即ち識が所取能取関係を欠くことである。

6.2 ここで瑜伽行派の主張する根本真実(mūlatattva)を検討したい。『中辺分別論』第3章「真実品」では、十種の真実が説かれる¹⁵。

¹⁴ 脚注1を参照。

¹⁵ MAVBh 37.7–10: etad daśavidhaṃ tattvaṃ yad uta mūlatattvaṃ lakṣaṇatattvaṃ / aviparyāsattvaṃ

瑜伽行派によれば、根本真実を根拠に他の九種の真実が確定される。

MAVBh III 3a' [Na37.17–20]: tatra mūlatattvaṃ / [MAV III 3a'] svabhāvas trividhaḥ parikalpitaḥ paratantraḥ pariniṣpannaś ca / tatrānyatattvavyavasthāpanāt /

それら（十種の真実）のうち、根本真実（mūlatattva）は三種の自性である。即ち、〈構想された〔自性〕〉（parikalpita[-svabhāva]）、〈他に依拠する〔自性〕〉（paratantra[-svabhāva]）、〈完成された〔自性〕〉（pariniṣpanna[-svabhāva]）である。なぜなら、それを根拠としてそれ以外の真実が確定されるから。

根本真実は〈構想された自性〉、〈他に依拠する自性〉、〈完成された自性〉の三自性である。これら三自性を根拠に他の九種の真実が確定される。その意味で、三自性は「根本真実」と呼ばれる。先に指摘したように、三自性は三つの観点から捉えられた識を指している。瑜伽行派にとって、識のみが真実在であり、その意味で三自性は「真実」と呼ばれ、また「勝義」とも呼ばれうる。

7 三自性が「真実」と呼ばれうることに基つけば、「〈他に依拠する自性〉が〈構想された自性〉を欠くこと」は、「〈他に依拠する自性〉という真実が〈構想された自性〉という真実を欠くこと」と言い換えうる。この場合、MHK V 87における「真実にそれ以外の真実が存在しないこと」は「〈他に依拠する自性〉という真実に〈構想された自性〉という真実が存在しないこと」を意味しうる。瑜伽行派にとって、「〈他に依拠する自性〉に〈構想された自性〉が存在しないこと」は識のあるがままのあり方を示すものであり、そのことを根拠に真実の直観が起る。MHK V 87で批判の俎上に載せられている瑜伽行派の主張はこのようなものである。

/ phalāhetutattvaṃ / audārikasūkṣmatattvaṃ / prasiddhatattvaṃ / viśuddhigocarattattvaṃ / saṃgrahatattvaṃ / prabhēdatattvaṃ / kauśalyatattvaṃ ca / (長尾 [1976]: 真実は次の十種である。(1) 根本の真実、(2) 相としての真実、(3) 倒錯のない真実、(4) 結果と原因の真実、(5) 粗大と細妙の真実、(6) 一般に承認された真実、(7) 清浄（にする知）の対象領域としての真実、(8) 総撰する真実、(9) 差別分類の真実、(10) 熟練知（善巧）の真実である）

8 以上の瑜伽行派の主張に対するバーヴィヴェーカの批判を検討しよう。彼の批判は『大乘掌珍論』においてより詳細に提示されている。

『大乘掌珍論』T30.274c14-19: 又汝所説於勝義上更無勝義。如是等言。若於此上空無此故説名為空。諸衣絹上更無衣絹。牧羊人等亦共了知。彼亦應名見真理者。又爲對治諸惡見故説如是空。於勝義上更有勝義。此類惡見曾未有故。不應遮彼説如是空。

羽溪 [1932]: 又汝の所説の『勝義上に於て更に勝義無し』とは是の如き等の言は、若し『此の上に於て空無きを此の故に説いて名づけて空と爲す』といはゞ、諸の衣絹の上に更に衣絹無きは牧羊人等も亦共に了知す。彼れも亦應に眞理を見る者と名づくべし。又諸の惡見を對治せんが爲の故に是の如き空を説く。勝義上に於て更に勝義有りとの此の類の惡見は曾て未だ有らざるが故に、應に彼れを遮して是の如き空を説くべからず。

ここでは、「瑜伽行派は『勝義にそれ以外の勝義は存在しないこと』が空性であると主張する」ということが議論の前提となっている。「衣にそれ以外の衣は存在しないこと」は誰もが理解している周知の事柄である。もし「勝義にそれ以外の勝義は存在しないこと」が空性であるならば、「衣にそれ以外の衣は存在しないこと」も空性であることになってしまう。そして、「衣にそれ以外の衣は存在しないこと」を理解している者は誰もが空性という真実を直観する者であることになってしまう。

また、もし「勝義にそれ以外の勝義は存在しない」という空性が誤った見解を斥けるために説かれたと主張したとしても、「勝義にそれ以外の勝義が存在する」というような見解を抱く者は存在しないから、そのように主張することは不合理である。

MHK V 87においては「衣にそれ以外の衣が存在しないこと」を「壺にそれ以外の壺が存在しないこと」と言い換えて、全く同様の批判をしている。すなわち、「真実にそれ以外の真実が存在しないこと」を根拠に真実の直観が起るならば、「壺にそれ以外の壺が存在しないこと」を理解する者が真実を直観する者になってしまうのである。

9 以上、MHK V 87を検討した。MHK V 87の解釈のポイントはa句の「真実にそれ以外の

真実が存在しないこと」を「〈他に依拠する自性〉に〈構想された自性〉は存在しないこと」と理解することである。「〈他に依拠する自性〉に〈構想された自性〉は存在しないこと」は〈完成された自性〉の定義である。本稿が提案する解釈に基づけば、バーヴィヴェーカがMHK V 87において〈完成された自性〉の定義を批判していることが理解できるだろう。

略号及び参考文献

- Ec See Eckel [2008].
- MHK *Madhyamakahrdayakārikā* (Bhāviveka). See Ms, SG, L₁, L₂, H, S, Ec.
- MHK(Tib) *Madhyamakahrdayakārikā* (Bhāviveka). Tibetan Tripiṭaka. D3855, P5255.
- Ms 蔣忠新「梵文《思釈焰經》抄本影印版・編者的話」『季羨林教授八十華誕紀念論文集 上』(江西人民出版社): 111-117, 511-522, 1991.
- L₁ See Lindtner [1995].
- L₂ See Lindtner [2001].
- MAVBh *Madhyāntavibhāgabhāṣya* (Vasubandhu): Gadjin M. Nagao, ed. *Madhyāntavibhāgabhāṣya: A Buddhist Philosophical Treatise Edited for the First Time from a Sanskrit Manuscript*. Tokyo: Suzuki Reserch Foundation, 1964.
- H See Hoornaert [2003].
- S See 齋藤 [2007].
- SG Shrikant S. Bahulkar, “The *Madhyamakahrdaya-Kārikā* of Bhāvaviveka: A Photographic Reproduction of Prof. V.V. Gokhale’s Copy,” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambhāṣā* 15: 1-49. 1994.
- SNS *Samdhinirmocanasūtra*. Étienne Lamotte, ed. *Samdhinirmocanasūtra: L’explication des mystères*. Louvain: Bureaux du Recueil, Bibliothèque de l’Université, 1935.
- TJ *Tarkajvālā* (Bhāviveka). Tibetan Tripiṭaka. D3856, P5256.
- TrBh *Triṃśikāvijñaptibhāṣya* (Sthiramati): Hartmut Buescher, ed. *Sthiramati’s Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of Sanskrit Text and its Tibetan Translation*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2007.

Eckel, Malcolm David

2008 *Bhāviveka and His Buddhist Opponents*. Harvard University Press.

Hoornaert, Paul

2003 “An Annotated Translation of *Madhyamakahrdayakārikā/Tarkajvālā* V. 85-114,” *Studies and Essays, Behavioral Sciences and Philosophy* (『金沢大学文学部論集行動科学・哲学篇』) 23: 139-170.

Lindtner, Chr.

1995 “Bhavya’s *Madhyamakahrdaya* (Pariccheda Five) *Yogācāratattvaviniścayāvatāra*,” *The Adyar Library Bulletin* 59: 37-65.

2001 *Madhyamakahrdayam of Bhavya*. The Adyar Library and Research Centre, 2001.

齋藤明

2007 「『中観心論』*Madhyamakahrdayakārikā* および『論理炎論』*Tarkajvālā*, 第5章「瑜伽行派の真実〔説〕の〔批判的〕確定」(*Yogācāratattvaviniścaya*) 試訳」『大乘仏教の起源と実態に関する総合的研究: 最新の研究成果を踏まえて』(科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書): 201-269

田村昌己

2011 「バーヴィヴェーカの瑜伽行派空性理解批判」『南アジア古典学』6: 93-117.

長尾雅人

1976 「中辺分別論」『大乘仏典 15 世親論集』(中央公論社) 所収

羽溪了諦

1932 『国訳一切経 中観部三』大東出版社

山口益

1941 『佛教における無と有との対論』(山喜房佛書林 1975年再版)

(たむら まさき、広島大学大学院 [インド哲学])